

原子力規制委員会記者会見録

- 日時：令和5年10月18日（水）14:30～
- 場所：原子力規制委員会庁舎 5階記者会見室
- 対応：山中委員長

<質疑応答>

○司会 それでは、定刻になりましたので、ただいまから、10月18日の原子力規制委員会定例会見を始めます。

皆様からの質問をお受けします。いつものとおり、所属とお名前をおっしゃってから質問をお願いいたします。御質問のある方は手を挙げてください。

ウエムラさん。

○記者 共同通信のウエムラです。よろしくお願いします。

今日の議題と関係なくて恐縮なのですが、先週の金曜日に関西電力が福井県に対して、敷地内の乾式貯蔵施設の設置などのロードマップを示しました。これについては受け止めがあれば、まずお願いできますでしょうか。

○山中委員長 関西電力の福井県内の発電所のサイト内の使用済燃料の中間貯蔵に関しての報道というのは、承知をしております。先週の会見でもお答えをさせていただきましたけれども、使用済燃料をプールに貯蔵しておくよりも、むしろキャスクに入れた状態で貯蔵しておくほうが、より好ましいというのは原子力規制委員会での従来からの見解でございますので、これについて乾式キャスクの貯蔵を進めるというところについては、好ましい方向かなというふうな受け止めをしております。一方で、そのような施設をサイト内に建設するというのであれば、やはりサイト内全体での使用済燃料の管理については、きちんと審査の中でも見ていかなければならない項目かなというふうに思っております。

○記者 分かりました。

それで、この関西電力のロードマップの中では、六ヶ所村の再処理工場が24年の上期に操業するということが前提となって進められています。先日、日本原燃の増田社長も、年内での審査終了は難しいというふうに発言されていたりとか、操業が本当に24年上期できるのかというふうな疑問は当然あるかなとは思っておりますけれども、そういった稼働の遅れみたいところは規制当局としては言及は難しいと思うのですが、どのように見ていらっしゃいますか。

○山中委員長 当然、事業者としては燃料の再処理工場への払出しというのも、全体の使用済燃料の管理上、計画されると思うところですが、再処理工場の審査の状況あるいは審査の完了時期ということについては、まだ規制委員会としては明言できな

いところでございますので、そのロードマップの成立性について、今私がコメントする立場にはないというふうに思います。

○記者 分かりました。

これまでの審査を振り返ってみると、結構審査書類に誤りがあったりですとか、この工程ありきの審査を進めてしまったというふうな批判が日本原燃に対して寄せられているという状況もあると思うのですが、その点についてはいかがでしょうか。

○山中委員長 これまで設工認だけではなくて、許可の段階でもスケジュールありきではなくて、きちんと審査書をまとめて審査会合に臨むようにという、そういう指示を出したところではございますけれども、さらに我々規制委員会と事業者との間に意見の齟齬がないように、工夫をするという取組についても、始めていただいたところですので、審査会合で決まったこと、あるいは合意に至ったことというのが漏れがないように、相互の理解が進むように、きちんと間違いがないように審査会合の終了時に、そのようなまとめをしていただいて、事業者にも理解した上で、次の会合に臨んでいただくという、そういう審査の改善も進めているところです。

○記者 分かりました。ありがとうございます。

○司会 ほかに御質問いかがでしょうか。

フクチさん。

○記者 朝日新聞のフクチです。

今週の月曜日ですけれども、東京電力の会見の中で2号機のデブリ取り出しに向けて、X-6ペネのハッチを開放したところ、大部分が堆積物で覆われていて、写真を見て、結構たまっている様子が確認できたのですが、あの状況を御覧になって、今後試験的取り出しの行方というのは委員会としてはもし把握されていればあれを見てどのように受け止めているか、お願いします。

○山中委員長 X-6ペネ、フランジを開放して、中の状況を確認したという結果についても把握をしております。かなり堆積物で覆われているという状況でございます。これについては、どういうふうに対処していくかということについては、これから東電と意見交換をしないといけないところかと思っておりますけれども、やはりスケジュールどおり、デブリのいわゆるサンプリング、これについてはなかなか難しいところかなというふうな感想を持っています。

○記者 ありがとうございます。東京電力としては年度内の目標を前提に作業を進めるということで、堆積物の除去をした上で、デブリを入れたいという認識はこの間の会見でも話をされていたのですが、今のお話からすると23年度内に堆積物を除去して、ロボットアームで試験的取り出しを始めるのは難しいんじゃないかという御認識でしょうか。

○山中委員長 堆積物がどのようなものかというのもまだ把握できていない状況ですし、

例えば水流のようなもので、取り除くということができれば、それほど困難ではないかと思うのですけれども、まずは管内の堆積物の把握、それから取り除く方法、この辺をきちんと決めてサンプリングに向かうという、それ次第かなというふうに思っております。

○記者 ありがとうございます。ハッチが解放する前もボルトを取り除くのが結構時間はかかったのですけども、実際にハッチを開いてみて堆積物があそこまで、もう上までぎっしり詰まっていたのを見て、率直に驚かれたりはしましたか。

○山中委員長 先週現場に行って、「あれは一体何ですかね」というのを検査官と少し意見交換させてもらったのですけども、検査官の中には電線等の物質ではないかという、そういう御意見もございましたけれども、これも本当によく分かりません。炉心部に関係しているような材料かもしれないし、ちょっとまだ想像の段階ですので、まだ私自身、どんな材料なのかなということもあくまでも本当に想像の段階ですので。

○記者 ありがとうございます。すみません、1点だけ最後、念のための確認で。先週、現場に行かれたときの意見交換というのはまだハッチ開放前なので、何か事前に何か3Dスキャンか何かで見た推定の堆積物の状況のお話をされたのかなと。

○山中委員長 いわゆる堆積物がありそうだという、そういう予想のもとで検査官と意見交換させていただいたことでございます。

○記者 分かりました。ありがとうございました。

○司会 ほか御質問、いかがでしょうか。

ハシグチさん。

○記者 NHKのハシグチです。よろしくお願ひします。

ちょっと議題と違うのですが、日本原電の東海第二原発のほうで、おととい発表があった防潮堤の基礎部の施工不良があったということがありました。重大事故対策の要である防潮堤に関わるものなのですけども、委員会としてどういうふうに捉えているのか、お願いいたします。

○山中委員長 日本原電から発表がございましたように、防潮堤の基礎部分でコンクリートの未充填の部分、あるいは鉄筋の曲がり等があったという報告を受けております。今後、事業者で調査・検討して適切に補修・補強がされて、工事がされるものというふうに理解をしております。当然こういうような補修・補強等については、日常の検査の中で適宜検査をしていく予定にしておりますし、当然のことながら使用前検査では設工認の計画に従った工事がなされているかどうか、ここについては確認したいというふうに考えています。

○記者 今回について施工不良、そもそも見つかったのは今年の6月ということで、結構前だったということだったのですけども、その日々の検査とか、日本原電は現地の規

制事務所に行っていたということだったので、それは上のほうというか、規制庁規制委員会のほうにも情報共有とか、どういうふうだったのでしょか。

- 山中委員長 今回、こういうの発表がございましたので、当時の状況というのは聞いております。事業者の職員から状態報告、いわゆるCRがCAP（是正措置プログラム）、是正措置会議に報告をされたということは検査官も把握しておりますし、ただ工事の中でございますので、現時点で規制委員会が何か取り上げるほどの重大性がある問題であるというふうには、今も認識しておりません。
- 記者 それはそのコンクリートの未充填とか、鉄筋の変形についても、その重大とはまだということですか。
- 山中委員長 現時点では適切な工事がこれからなされれば、それはもう使用前検査で確認をしていくという、そういう事案であるという理解でございます。
- 記者 工事を4か月間中断していて、日本原電は来年9月ですかね、全ての安全対策工事完了という時期を掲げていますが、そのスケジュール、今後の補修工事とか、使用前事業者検査などを考えるとスケジュール的にはどういうふうに捉えていますでしょうか。
- 山中委員長 これもスケジュールといいますか、補修工事の状況というのはもうこれは事業者次第ということでございますので、我々といたしましては、使用前検査をきちりとやるという、そういうところでございます。
- 記者 工程優先と十分な対策というのは、両立というのは難しいと思うのですが、規制委員会としては日本原燃にどういうところを求めていきたいと思いませんか。
- 山中委員長 適切ないろいろ補修あるいは補強工事がなされるものというふうに考えておりますし、それは事業者自身が適宜行うところかと思えます。
- 記者 今回見つかった防潮堤の後ろの部分なのですが、ほかの工事も、今工事が行われて、完了しているところもあるのですが、そういうところへのさらなる調査等は求めはしない。そこも検査でということですか。
- 山中委員長 当然、その使用前検査で設工認の計画どおりに行われているかどうかについては、きちりと見ていくつもりにしておりますし、今回こういう不具合があったということは頭に置いた上で、当然検査官も検査をしに行くということになるかと思えます。
- 記者 それに今後、設工認の補正だったりとか、そういった審査・検査への影響というのは、今回の事象、どういうふうなものが。
- 山中委員長 これは事業者の判断で、例えば設工認にないような工事を仮に行うということになれば、当然変更は必要になってまいりますので、変更が事業者からなされるということになるかと思えます。
- 記者 最後に、今回も防潮堤に関する不適切ということだったので、他プラントへの水平展開というのは今のところ考えていますでしょうか。ほかのプラントへの。

○山中委員長 特に今、他プラントへの水平展開というのは考えておりません。

○記者 分かりました。ありがとうございます。

○司会 ほかに御質問いかがでしょうか。

ハットリさん。

○記者 読売新聞社のハットリです。

福島第一原発のデブリ取り出しの関係で、原子力損害賠償・廃炉等支援機構（NDF）が、今三つの工法というのを提案して検討を進めているのですが、デブリ取り出し工法について委員長の見解があれば教えてください。

○山中委員長 三つの工法が提案されているということは承知をしております。新しい、いわゆる充填物を充填をして取り出していくのだという新しい提案についても、非常に興味深い方法であるというふうには思っております。これから具体的に東京電力とNDFの間で協議はされるものというふうに思っておりますし、当然実際の取り出しということになれば、規制委員会に対しても、そういう申請がなされるものというふうに思っております。

今、どの方法がよさそうかということは、特に現時点では何か判断をしているわけではございません、私自身。三つ目の方法は興味深い方法であるとは思っております。

○記者 充填固化、興味深いというのはどんな、どういう意味で興味深いのですか。

○山中委員長 どういうものを充填されるのかということで、やはり強度であったりとか、あるいはその遮へいの能力であったりとか、あるいはその重量が軽いもので遮へい能力があれば、非常にそれは有効な1つの方法かなというふうに思っております。

○記者 分かりました。ありがとうございます。

○記者 ほかに御質問いかがでしょうか。

マサノさん。

○記者 フリーランス、マサノです。よろしくお願いします。

先ほどの東海第二原発の防潮堤の工事の件なのですけれども、聞くところによりますと10月16日に共産党が記者会見をすることが分かってから、規制庁に日本原電は報告に行ったということを聞いています。それに対して、日本原電は隠蔽していたのだという批判がありますが、どのようにお考えでしょうか。

○山中委員長 先ほどもお答えをさせていただきましたけれども、現場では状態報告、CRというのがCAP会議でも報告をされておりますし、事業者自身、隠蔽をするつもりがあったというふうには考えておりませんし、現場の検査官もその時点で把握していたというふうに聞いております。工事自身、適切に行われるものというふうに私自身も思っておりますし、工事の最中でございますので、規制委員会が今、現時点で何かこの問題について、問題にするということは考えておりません。

- 記者 なるほど。そうすると6月の時点から、もう現場の検査官は御存じだったということでしょうか、規制庁。
- 山中委員長 そのように聞いております。早い時点で検査官は知っていたということでございます。
- 記者 次の質問をさせていただきます。柏崎刈羽原発で、また侵入検知器が半日動かなかった。しかも、それが誤ってスイッチを切ってしまったというふうに報道されていますが、東京電力は柏崎刈羽を運転できる能力はあると、まだお考えでしょうか。
- 山中委員長 検知器のスイッチをオフにしたという案件、報告を受けております。詳細、これ、セキュリティ上の問題でお答えをすることはできませんけれども、検知ができなかったという状態にはなっていないかったというふうには聞いておりますので、セキュリティの検査官のほうからは、軽微な事象であるというふうな報告を受けております。特に、何か核物質防護の追加検査に影響を与えるような事案であるというふうには認識しておりません。
- 記者 次に、今日の議題で、議題2なのですけれども、アメリカのロビンソン2号機という原発、PWR（加圧水型原子炉）ですか。
- 山中委員長 はい。
- 記者 世界で8番目に古い52年もの原発だそうなのですが、これは、まず炉心槽というのを今回、初めて知ったのですけれども、委員長はこの炉心槽という存在は御存じだったか、それはどのような役割をしているものだったのかというのは御存じでしたでしょうか。すみません、失礼な質問で恐縮です。杉山委員がどうもシュラウドとどう違うのですかという質問もされていたので。
- 山中委員長 今日の資料の、お手元にもし皆さんお持ちであれば、資料2の42ページを見ていただくと、どういうものかというのはよく分かっていたいただけるかなと思うのですが、ちょうど圧力容器の内側に炉心槽と呼ばれる容器のようなもの、筒のようなものが入っております。これで炉内の様々な構造物の位置を決めたり、あるいは、流路を設定したりという、そういう役目をするものであるということでございます。
- いわゆる、その炉心からかなり離れた上部の溶接部分でクラックが見つかったということでございます。原因については、まだ米国でも調査中ということでございますし、国内の事業者からの聞き取りによれば、安全上、直ちに不具合が生じるものではないということではございますけれども、さらに何か危惧のある部分がないかということでは、報告を事業者に求めているところでございます。
- 私自身こういうものがあるということは、特に、いわゆる炉心中央部では、多分、マサノさん、御存じだと思うのですけれども、IASCC（照射誘起応力腐食割れ）という現象が問題になる部分というのがございます。バッフルフォーマボルトというボルトに割れが入るといような、そういう現象が炉心の中央部では、経年劣化の現象として起こる可能性があるというふうに言われておりますけれども、今回はかなり炉心から

離れた部分でございますので、恐らく違う現象かなとは思いますが、これはもう米国の調査を持ちたいというふうに思っております。

○記者 議論の中で、劣化事象かどうかはまだ分からず、今おっしゃった中性子照射による応力腐食割れ、IASCCですか。

○山中委員長 はい。

○記者 とかという可能性もあるということで、これ、やがて分かっていくとは思いますが、その前に、日本での水平展開、こういったものに対する点検というのは、やらないのでしょうかということを念のために伺います。

○山中委員長 当然、日本でもVT-3という目視検査、ビデオ撮影をして確認をするという検査は行っております。

それに加えて、さらに精度のいい検査を実施できるようにということを準備をしているところでございます。

○記者 そうすると、例えば米国の検査の結果、これを経年劣化、長期管理計画の中にも取り入れていくというようなことも規制としてあり得ますでしょうか。

○山中委員長 もちろん原因次第で、そういうことを考えなければならないということもあり得ます。

○記者 ありがとうございます。一旦、終わります。

○司会 ほかに御質問いかがでしょうか。

タシマさん。

○記者 共同通信のタシマです。よろしく申し上げます。

今日の午前中の定例会合の議題1についてなのですが、原子力災害対策指針の見直しの改正案についての意見公募で、いろいろ意見を出された方にいろいろ誤解があったというようなところがあったのですけれども、結構いざ災害が起こったときにどんな動きをするかというのは、原発の周辺の方々にとっても重要な事項だと思うのですけれども、そういった事項で、そういった誤解があるということについて、どのように受け止めていらっしゃいますか。

○山中委員長 そのような誤解がないようにしなければならないというふうには思っておりますし、特定重大事故等対処施設というのが、重大事故が起こる状況にならないようにするために、使えるように、我々としてはルール上しているということをまずは御理解をいただいて、今日の資料の中でも、EAL（緊急時活動レベル）の設定について、どうなったら、例えば、SE（施設敷地緊急事態）になるのか、あるいはGE（全面緊急事態）になるのかという、この辺りについては、今日の資料の中でも、できるだけ分かりやすくまとめていただいたつもりでございますので、その辺り、一般の方にも、こうなったらそうなんだなというのを御理解いただくとともに、特重をどういうふう

に使っていくのかということについても、今日お答えの中で説明をしていただいたというところでございます。

○記者 もともとこういった原子力防災に興味がある方でしたら、こういった会合の資料などを御覧になられたりすると思うのですが、多分そうでない方々に届けるというのは結構大変なところだと思うのですが、その辺りの工夫はどのように考えていらっしゃいますか。

○山中委員長 やはり日々の様々な防災訓練を通じて、こういう情報に触れていただくということが大切かなというふうに思っておりますし、私どもも総合防災訓練とか、あるいは、住民が参加されるような訓練にも参加をしておりますので、そういったところで、分かりやすい情報発信をしていくということが大切かなというふうに思っています。

○記者 ありがとうございます。

すみません。話題がかわって最後の質問なのですが、先ほど冒頭やり取りで、関電の福井県での乾式貯蔵の施設の件でやり取りがあったのですが、その中で、関電のロードマップの成立性については、特段、今、コメントするべきではないということだったのですが、改めてちょっとお伺いしたいのですが、そういった審査がどのようになるか、展開がどうなるか分からない事業者施設の稼働というものを当てにして、その計画、立てるその関電の姿勢についてはどのように見ていらっしゃいますか。

○山中委員長 時期についてどういうふうに考えるかというのは、事業者のお考えだというふうに思っておりますけれども、我々、こういう中間貯蔵などの施設、敷地内貯蔵なんかの審査の場合に、やはりサイト全体での燃料のマネジメントをどういうふうにしていくんだということは、きちっと審査の中では見るようにしておりますし、当然その中では、最終工場の払出しは、これぐらいの時期からこういうふうになると考えていますということも含めて、我々、審査の中で見るようにはいたしております。

時期の見込みというのはなかなか、審査の状況次第というところもございまして、その点については、確かに御指摘のとおり不確定な部分でございます。

○記者 一方で、関電は、乾式貯蔵施設は造るけれども、サイト全体の貯蔵量自体は変えないことを示しています。これって実際、こういったことって可能でしょうか。今、関西電力が持っている原発が全機稼働している中で、そういったことって実際に実現できるようなことなのでしょうか。

○山中委員長 どういうような乾式貯蔵の施設、どれぐらいの規模で、どういうような運用をされるかというのは、これはもう申請を受けてみないと分かりませんので、サイト全体の燃料のマネジメントが今、私が想像してどうなるかということについては、今お答えをちょっとすることはできないかなというふうに思っています。

○記者 分かりました。ありがとうございます。

○司会 ほかに御質問いかがでしょうか。

ヤマノウチさん。

○記者 電気新聞のヤマノウチです。

災害対策指針の改正に関連して、今後、事故進展の遅い事象のEALの見直しを議論されるそうですが、それに当たって、何か注目していることはありますか。

○山中委員長 EALの見直しについては、今日2点出てきたと思うのですが、進展の遅い事象、実際に、進展の遅い事象のほうが実際に起こり得るのかなということで、やはりそういうことについては事前に検討して、設定をしておくべきだろうと私自身は思っております。

もう1点、今、原子力発電所だけEALについては詳細検討しておるわけですが、再処理工場等についても、きちっとEALについては設定をする必要があるかなというふうに思っています。

○記者 今、再処理工場等とおっしゃってしまして、実際、今日の資料では、原燃の蒸発乾固、一つ、例に挙がっていましたが、それ以外の施設でもEALの設定とかに何か影響したり、新たにつくるということが今想定されているのですか。

○山中委員長 再処理工場では、重大事故等の発生可能性がある施設が幾つかございますので、当然、EALの設定というのは必要になってくるかなというふうに思っております。

それ以外の施設では、重大事項が発生する可能性のある、例えば試験研究炉等については、当然そういうものは必要ですし、見直すべきところは見直していく必要があるかというふうに思っています。

○記者 ありがとうございます。

○司会 ほかに御質問いかがでしょうか。

それでは、マサノさんで終わりにしたいと思います。ほかの方よろしいでしょうか。マサノさん、お願いします。

○記者 度々すみません。フリーランス、マサノです。

高浜3号機についてなのですけれども、昨日ですか、蒸気発生器の伝熱管が損傷していたという発表があったようなのですけれども、約1万本、蒸気発生器がある中で2か所、1か所が減肉と見られる、で、1か所が割れと見られるということであったのですが、これは経年劣化によるものなのかどうなのかということが気になるのですが、どのようにお考えでしょうか。

○山中委員長 高浜3、4号機、今回3号機でございましたけれども、3、4号機、蒸気発生器の外面割れというのは結構、各定期検査中に見つかっております。

これについては、劣化事象であるとは判断しておりますけれども、高経年化の事象で

あるとは考えておりません。

内面割れについては、御承知だと思いますけれども、粒界に沿ったSCC（応力腐食割れ）、外面については、これまでいろいろ調査をした結果からいたしますと鉄のスケールによるフレッチングであるという、そういう結論を得ております。

当然、施栓という対応をして使用することになるかと思えますけれども、外面については、これ、高浜3、4号機で初めて見つかったような事象でございますので、原因が分かるまで非常に私も原因究明には慎重に対応したわけでございますけれども、現在では、そのスケールによるものだという事は分かっておりますので、今回、改めて内面と外面と1本ずつ見つかったわけでございますけれども、それほど今は重要な問題であるというふうには認識しておりません。

○記者 今回は定期点検で分かったということなのですけれども、例えばこれが、ある時点を境に一斉に劣化するとか、そういうこともあり得るんじゃないかとちょっとおそれてしまうのですが、一般人としては、やはり、運転期間によって区切るという、毎度の質問で恐縮ですが、運転期間で区切るということが非常に重要じゃないかと思うのですが、念のためにお伺いします。

○山中委員長 あくまでもこの蒸気発生器のきずという事象については、定期検査で見つかる劣化事象であるというふうに判断しておりますので、特に高経年化事象であるというような判断はしておりませんので、定期検査できっちりと調べていただければ発見できる事象であるというふうに思っております。

また、他の発電所で起こったような、施工不良による、いわゆる振れ止め金具によるフレッチングのような現象で、多数、損傷が出てくるというような、そういう事象でもございませんので。

私自身は、今回、見つかったような事象というのは、あくまでも定期検査等で見いだされるような通常の劣化事象であるというふうに考えています。

○記者 すみません。交換する、そうすれば大丈夫という、そういうことなのでしょうか。

○山中委員長 施栓をすれば使用できる。

○記者 「セセン」。すみません。

○山中委員長 栓をする、細い配管に栓をして使わないようにするという、そういうことでございます。

○記者 使わないようにする。

○山中委員長 はい。

○記者 分かりました。ありがとうございます。

○司会 ほかによろしいでしょうか。

それでは、本日の会見は以上としたいと思います。ありがとうございました。

-了-